いえば駒込・浅草の浅間神社や駒込の富士詣を専ら示していた点・随筆類を書くような知識層（上は大名から下は市井の僧侶まで）は富士講（不二道）を批判的かつ嘲笑的にみていた点などは、富士信仰内部の史料や民俗としての富士講を追うだけでは決して得られない外界の反応である。富士信仰内外を複眼的に捉えることで、より具体的な彼らの実態をより正確に把握できるものと思われる。

鎌倉時代の夢信仰の一断面

——沙石集を中心として——

河 東 仁

『沙石集』は、無住（一二二六—一三二二）によって著された、鎌倉期の説話集である。序に記されているように、王朝期以来の伝統的な文学観を継承し、世俗的な話題を通して、仏教の教義を平易に説き明かそうとしている。そのため後世へ大きな影響をもたらし、ことにその滑稽譚は、江戸文学の先駆けになったともされる。

無住は鎌倉で生まれ、十八歳のとき得度、関東や大和の諸寺にて密教や禅など諸宗を修め、一宗一派に偏らぬ諸宗綜合の立場をとった。また神仏習合を明確にうちだしたことも知られる。

このため『沙石集』は、従来の研究においては、理論的体系に裏づけられていない雑駁なものともみなされがちであった。し

かしこうした神仏混淆は、まさにこの頃の精神状況を映し出したものであり、鎌倉時代の夢信仰を知る上で看過できないものと言えよう。

『沙石集』全十巻のなかに記された一五〇条あまりの説話のなかで、実夢について語っている話は全部で四九例を数えることができる。ただしこれは、幻覚体験（白昼夢）五話を含めての数である。そしてこれらの夢譚を内容に沿って分類すると以下のようなになる。

- a 神祇信仰に関わるもの——現世へ執着することの非を論ずる神、仏法の教説を教える神、道心のなさを非難する神、僧への非礼をとがめる神、往生を確約する神、無実の罪をはらす神、非力を告白する神、死穢を厭わぬ神。
 - b 諸仏菩薩の靈驗に関わるもの——薬師如来の靈驗、観音の靈驗、地藏の靈驗、不動の靈驗、弘法大師の靈驗、阿弥陀の靈驗、仏舍利・如意宝珠の靈驗。
 - c 来世での報い——地獄界へ堕ちる話、野槌・馬・犬・雉など畜生界に転生する話。
 - d 和歌陀羅尼論——歌の功德で命が助かる、神仏から歌を授かる、歌で自分の死を報せる、死者と歌を交わす。
 - e その他——仏典の夢譚の引用、殺生の戒め、滑稽譚。
- そして以上から、『沙石集』における夢譚の特徴として、以下のことが指摘されうる。
- a 従来の現世利益的な神祇信仰が見られる夢譚は少なく、むしろ和光の方便として、仏の代理を神が務める話が多くなっている。

第15部会

b 従来の説話集に比して、観音の靈驗譚が激減しており、その代わりに地蔵の靈驗譚が増大している。ちなみに十二世紀初頭に成立した『今昔物語集』では、全百九十話の夢譚のうち、地蔵をめぐるものは五話のみとなっており、鎌倉期になつて地蔵信仰が興隆したことが『沙石集』には如実に反映している。その内容は、地蔵菩薩の仏像をめぐる靈驗譚もさることながら、地獄界へ堕ちた者が、地蔵に救われる話が大半を占めている。ただし地蔵信仰への偏りを防ぐためであろうか、地蔵菩薩も宿報には勝てないと告げる夢譚の記されていることが特徴的である。

また往生夢が二例しか記されていないが、これは当時の浄土信仰の隆盛を考えると、きわめて興味深い。恐らくは、専修念仏を妄執とみなす無住の思想が関わっているものと思われる。

c 畜生界への転生譚は、従来の説話集とさしたる相違はない。しかし地獄界の描写は、後になつて成立した『太平記』における結城宗広の墮地獄譚を思わせるような非常に克明なものになつている。ここには『往生要集』と『北野天神縁起絵巻』の影響が考えられる。

d 和歌陀羅尼論をめぐる夢譚が多出する点は、『沙石集』の大きな特徴となつている。